

永平寺門前：道元禅師御歌碑の内容

永平寺への参道には、曹洞宗の開祖道元禅師（1200–1253）によって詠まれた和歌 9 首が刻まれた石碑が点在している。和歌は訪問者に禅の精神を思い起こさせ、日常生活の中に仏教の教えを取り入れることができるようにとの願いが込められている。各詩は和歌の形式で書かれ、5、7、5、7、7 の 5 行の音節の 31 文字で表現されている。

道元禅師は日本の禅の父として知られているが、道元禅師は優れた和歌の詠み手であり、60 首に及ぶ歌が記録されている。その作品は後に続く多くの作家に影響を与えた。1968 年にノーベル賞を受賞した小説家の川端康成（1899–1972）は、受賞スピーチの冒頭で、道元禅師の最も有名な和歌の 1 つを披露した。

春は花
夏ほととぎす
秋は月
冬雪さえ
冷しかりけり

川端康成はスピーチの中で、季節を表す言葉と、伝統的な描写に過ぎないこの和歌の素朴さについて説明した。和歌の素朴さは日本の本質を表現していると川端は言った。他の和歌と異なり、この和歌には題が付けられている。題は「本来のめんぼく」と名付けられ、「本当の顔」あるいは「本当の性格」を意味し、和歌の単純な構成と相まって、日本の真の姿とは、よく知られているような古典的な季節のイメージに他ならないということを伝えている。曖昧さや巧妙な言葉遊びをさぐるのではなく、道元禅師は日本の季節を、あるがままに描きだしているのである。

この和歌は永平寺の入口の石碑に刻まれている。

禅の公案のように、思考や理解の特定の段階を「突破」するように意図された不可解な質問や逆説的な問いかけがあるが、道元禅師の執筆の力は、非常に少ない単語で深い意味を表現する能力にある。また、別の和歌で道元禅師は、冬の生き生きとした情景を描きながら、禅の修行者に重要なメッセージを伝えているものもある。

冬草も
見えぬ雪野の
白鷺は
おのが姿に

身をかくしけり

白鷺は
雪原に立つ
すぐには見分けられないが
白鷺の姿が隠れるところから
枯草が始まる

白鷺は古典では夏を代表する動物であるが、この和歌では冬の深みの中で、自己感覚の全てが失われているように描かれている。雪に覆われた枯草からは自分が認識できない。これと同じように、道元禅師は禅僧の理想的な姿を伝えている。修行に没頭することは禅の道から離れることはないのだと。

この和歌は、越前地方（福井県）の伝統工芸品を販売する瓦屋根のギャラリー「寧波」の前にある